
僕らの力の使い方

最近寝不足気味の忍者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕らの力の使い方

【Nコード】

N7363X

【作者名】

最近寝不足気味の忍者

【あらすじ】

さあついに始まりました。

最近寝不足気味の忍者がお送りする超廚二病超能力系小説。

ここからどのように話が展開して行くのか。

そして、作者のやる気は何日持つのか。

温かい目で見守ってください。

プロローグ（前書き）

さあついに始まりました。

最近寝不足気味の忍者がお送りする超廚二病超能力系小説。

ここからどのように話が展開して行くのか。

そして、作者のやる気は何日持つのか。

温かい目で見守って下さい。

プロローグ

自分の力は、自分の力。

分かりにくいだろうか？

なら言葉を変えよう。

自分の持つ特別な力は、誰にも犯される事のない、自分だけの絶対領域。

人が持つ無限の可能性への扉。

その力を、何のために使うのか

自分のために使うのか。

仲間同士でもどうにもならない時に使うのか。

他人のためだけに使うのか。

凡人を装い、隠し続けるのか。

その考えは誰にも変える事は出来ない。

しかし、手を伸ばしてあげる事は出来る。

心から。

私はそう信じたい。

d y 作者

問一 なぜ焼きそばパンは早く売り切れるのだろうか(前書き)

答え

「つまいからだろっ」

そして、この少年。

牧野^{まきの} 拳治^{けんじ}は。

「う……うう……」

その場で小さく泣き崩れた。

さて、この小説を読んでいただく前に、この学校のシステムを理解していただかないと話について行けない部分があると願いたい。

なので此处で簡単なこの学校のシステムをお話ししよう。

ここは、世界でも少数が発現する超常現象を引き起こす力を持つ者、通称『超能力者』の力を安定させ暴走の危険を調査しながらも、社会に役立てられる法を研究している研究所兼教育校。

超能力者育成専門学校。

その学校に通っている生徒は年齢問わず、誰でも超能力者である。

げんに、招来術に関するものはこれを含めて数冊しかない。

しかし、少年はそのすべてを読み終わると、本を閉じ立ち上がる。
彼も…いや、彼女もこの物語を描く材料の一人なのだ。

「よ、よし、私もこれから中学生！ …と呼ばれる年齢！
今まで以上にがんばるぞおお！」

と声を張り上げるも、実際は周りの声に全てかき消されて行く。
天然茶髪をショートに切り化粧もしてないせいかな若干幼い感じがするこの女の子。
そう、この流れで分かる通り、この子も作者が展開する物語の登場人物。

「あ、あの、すみません。」

「二組ってどこですか…聞こえていますよね？ …聞こえて下さい…
…あの」

と思いたい。

数多の人が行き交う場所。

その人達がこの物語と言う名のキャンパスに、どんな絵を描くのか。

それは次からのお楽しみ。

問一 なぜ焼きそばパンは早く売り切れるのだろうか（後書き）

作者「いや〜終わった終わった」

主人公「まてまてまて」

作「なんだよ、今から飯食おうと思っただけだ」

主「あんた今日友達に「んじゃ楽しみにしてて」「っていったら？」

作「うん」

主「たった二話で楽しめると思っただけか？」

作「うん……………うん？」

主「と言っ事で、今回は調子に乗ってもう一話投稿します」

問二 「人はなぜ約束をやぶるのk(殺) なぜ主人公は面倒事に巻き込まれた

答え「きつと眠かったんだy(射殺)」

業界用語でオイシイって言うんだよきつと

問二 「人はなぜ約束をやぶるのか(殺)」なぜ主人公は面倒事に巻き込まれた

真つ暗な暗闇の中。

そこは人の部屋だった。

正確に言うと、学校内の寮の部屋。

しかし、暗闇とは裏腹に時間はまだ昼過ぎだ。

ならなぜ暗いのか。

答えは簡単でカーテンや小さな隙間を全て閉じているのだ。

もちろん、ただ単にん練炭自殺をしようとか、そんな事は考えていない。

今からする『事』には、部屋を暗くする必要があるのだ。

闇の中から、一人の人物：女。

『ソフィ・ラグラント』は床に刻み込まれた陣に踏み込む。

今この場に

最悪^{災厄}を呼び込むために。

「でさあ」

所変わり此処は職員室。

せわしなく急がしそうに働く教師達の中に二人は居た。

先に喋った人物は、作者も認めたくはないがこの物語の主人公、牧野 拳治。

「なんで俺が呼び出されてんの？ 俺何も悪い事してないよ？」

「何もしてないから呼び出されてんの」

「え、なに？ 悪い事しろってそう言う相談？ うあ、聞いちゃったよ先生の黒い話…」

「人の話を聞けえ！！」

そして、たった今拳治に突っ込みを入れたのが、この学校の数学教師 渡辺 わたなべ 知晃 ちあき。

「おまえ…自分で単位ヤバいの知ってんだろ？ このままじゃ落第…」

「でも俺 超能力者はこの学校で勉強するのは義務になってるから退学はないだろ？」

そう、法律で彼ら超能力者はこの学校で学ぶ事は法律で義務化され

ている。

その実態は、力をうまくコントロール出来ない者達の隔離が目的なのだが、その話は、今するべきではない。

「確かに退学は出来ないが自宅謹慎は出来るぞ？」

「謹慎？ 俺学生だよ？」

刹那。

「ふん！」

職員室に突風が吹く。

しかし教師達はまたかと言わんばかりにため息を吐きながら吹き飛んだ資料を拾い始める。

原因は、知晃の能力、『エアバスターカー空気砲』

空気系統の能力でも、空気の圧縮に特化した能力で

それを打ち出し相手を吹き飛ばす事も出来る。

食らった本人はそのまま吹っ飛び壁に激突。

「し、死ぬ！ ギャグパートでなければ死人でるよ！」

ギャグパート言うな。

しかし、そんな拳治バカを無視して踏みつける知晃。

「バカって言われた！ 拳治って書いてルビはバカだブルロオアアアアアアツ！！」

「お前うるさい、そして人の揚げ足とるな」

「…」

「…」

まずは場所の説明からさせてもらおう。

ここは、この学校内の寮の青の寮長室。
寮長室や青などの説明は次の回をまるまる説明に使うのでそこで見
てほしい。

次にこの二人の人物から。

上の「…」がこの青の寮の寮長、『秋本^{あきもと} 原樹^{はるき}』

下の「…」が此処とは違う赤の寮の寮長『杉崎^{すぎさき} 歩美^{あゆみ}』

「…」

「…」

凄まじく集中しているこの二人。

オセロでここまで集中する人は居ないだろうというくらい集中している。

現代語で言えば『ガチ』だ。

「……」

「……」

「……クツ」

「やったー勝ったー！」

どうやら勝者は歩美らしい。

だがしかし、原樹は悔しさが半端ないらしく、白い灰になっている。

「はいはい、白い灰になっても免除しないから早く出した！」

「……チツ」

すると原樹は財布から3,000円を取り出し歩美に渡す。

どうやらコイツらは小遣いを賭けて真剣勝負していたらしい。

「ヤター！ 3,000円ゲーツ！」

歩美の喜び方は尋常ではなかった。

しかし、原樹はなんの反応もない。

この女が金の使い方が荒く、また金の目のなさが凄まじいのはもう慣れた。

さすがに最初は驚いた……というよりは引いたが。

「喜ぶのも良いけど、ちゃんと考えて使えよ」

「え、良いじゃん。もうアタシのお金だし」

「そして無くなったら俺のところに来ると」

「そう」

「ふざけんな！」

「いいじゃん、アンタ、アルバイトしてんだし」

「アルバイトじゃねえよ強制労働だ！」

寮長になると仕事があり、月々少ないが報酬があるのだ。

「いいからいいから」

「『いいからいいから』…じゃねえ!!」

怒声と共に氷柱が原樹の体から飛び出し、

しかしそれは歩美に当たる事はなく窓から外に飛び出していった。窓が開いててよかったね。

「残念はずれ、じゃあね」

そう言い残すと歩美はそのままドアから逃げて行った。

残された原樹はその場に座り込むとせつせとオセロを片付け始める。

37勝38敗26引き分け

これが原樹と歩美の成績だ。
もちろん種目はオセロだけではないが主にオセロ。
たった一勝でも自分を上回った事がさっきの喜びの理由かもしれないと、原樹はふと思った。

「……………つふ……………」

後に、校舎の壁を氷柱で破壊した『テンブラーチャー温度干渉』の原樹は反省文を書かされたらしい。

問二 「人はなぜ約束をやぶるのk(殺) なぜ主人公は面倒事に巻き込まれた

拳治

「まてまてまてまてまて！！ 何だこの怪物！！ 何だこのドロドロ
口！！」

しかもさっきまで無差別だったのに、へんな女が来てから俺ばっ
か狙うんだけど！！」

次回の『僕らの力の使い方』は

拳治

「問三 なんで走らなければならないのか」

入学案内

我が校は、超能力者であれば受験無しで通える高校です。

しかし、ここに入学したら夏休み以外、卒業までは家に帰れません。

我が校は完全全寮制学校であり、超能力者であれば小学生の年齢から高校卒業までエスカレーター式です。

寮にはそれぞれ色分けされており

白寮

赤寮

青寮

黒寮

この4種類の寮で分けられます。

それぞれの寮には一人ずつ寮長が存在し、教師の代わりに寮内で起きたいざこざを解決してもらう役割があります。

これは、普通教師よりも仕事は何倍もある我が校の教師の負担削減のためです。

問三 なぜ走らなければならないのか (前書き)

答え 止まったら死ぬから

「牧野 拳治…」

その様子を事の発端者は屋上から見学していた。
しかし、意外な人物があゝの怪物と出くわしたものだ。

牧野 拳治

学校でも信頼度が一番高い白の寮。

そしてその寮の彼は寮長なのだ。

しかし、おかしい。

寮長の第一印象。ソレは強さ。

青の寮長 秋本原樹は自身の体温を変化させ外に干渉し灼熱と絶対
零度を操るといふ、氷系統の能力最高の戦闘能力を誇る

『テンブラーチャイ
温度干渉』

赤の寮長 杉崎歩美は自身の重力を操作したり、質量、密度、重量
をあらかじめ設定し、

その設定どつりに（素材は鉄物質限定だが）様々な物を生み出す。
『サイコグラヒティ
質密重操作』

しかし、ソフィの中では拳治に対する説明書きが白紙なのだ。

いや、それだけでは驚かない。

問題なのは、目撃した者の証言。

曰く拳治は、手から炎を生み出した。

曰く拳治は、剣を生み出した。

曰く拳治は、鋼の体を作り出した。

知っている限りの能力でもこのように応用のきく能力はソフィは知らない。

「……………試す必要がありますね」

自分の成すべき事の、障害となるか。

いや、相手は走りもしなかった。
ただ呆然と立ち尽くしているだけだった。
しかし、拳治は再び身構える。

相手の後ろに違う人影が居るのだ。

それは、あのドロドロに何かつぶやくと、すぐさま後ろを向き歩き出す。

刹那

『ゴアアアアアアアアアアア』

目の前のドロドロは拳治に向かって走り出し、その巨大な拳を横薙ぎに振る。

しかし、巨体だけあって動きがのろい。

拳治は焦らずそのままバックステップで回避する。

しかし

「ぬぁ！」

拳を振るった時の風圧で吹っ飛ばされたのだ。

「くっそ、もう怒った！」

拳治は腕を前に突き出す。

「……あれは」

拳治は腕を前に突き出し、指鳴らしの形を作る。

（俗にいう、指パッチン）

拳治は何をする気なのだろう。

拳治はならず。

指を、

化物に向けて

すると、音は集まり轟音となり。

化物を吹き飛ばす。

『!!!??』

吹っ飛ばされた本人は訳が分からなかった。

なぜ自分はこうなった。

しかし、答えを出す前より早く、化物はこの場から姿を消した。

「……………ふう」

ソフィは腕を突き出していた。
あの化物をもとの場所に戻したのだ。

化物の力の評価はとても高い。
すばらしい。

しかし問題は拳治だ。

音を操作、風系統の音を操る能力 『ノイズクリエイター音響制作者』

しかし、その能力を使っても炎は出せない、剣も生み出せない、体も硬質化できない。

今のソフィには答えを出す知恵はなかった。

問三 なぜ走らなければならぬのか (後書き)

拳治

「俺強つ!？」

作者

「なんだ、今度は何が不満なんだ」

拳治

「いや、不満はないけど……」

問四 なぜ後処理は面倒なのだろうか（前書き）

答え 執行中はそんな事気にしないからじゃないの？

問四 なぜ後処理は面倒なのだろうか

こんにちは。

ふるはた いすみ
古畑 泉といます。

え、誰かって？

そうですね、初めて登場しますからね。

でも名前が出てないだけで一回登場してるんですよ？

「問いー なぜ焼きそばパンは早く売り切れるのだろうか」のおどおどした中学生。

分からない人は

『あ、あの、すみません。』

「二組ってどこですか…聞こえてますよね？ …聞こえて下さい…
…あの…」

と言っていた人です。

今回初めてこの小説に名前が出てきてとても嬉しいです。

でもですね、何も書く事がないんですよ。
だって。

「はあ」

中学年生一年、古畑 泉は学校の広場でうなだれていた。

せっかくの初登（ゲフンゲフン

せっかく今日は学校自体は休みで授業も無いのにやる事が無い。
さっきから地面のレンガタイルを数えては止め数えては止め…。

「……暇だなあ」

「なら手伝って」

「はあい……………はい？」

目の前には、上級生の…
たしか名前が拳治^{バカ}…あれ？

「あのさあ……………泣くよ？」

なぜ彼が此処に居るのか。

それは数時間前にさかのぼる。

学校の校庭でたたずむ二人。

一人はこの物語の主人公、牧野拳治。

そしてもう片方はこの拳治の担任で数学教師の渡辺知晃。

「……………なあ先生」

「なんだ」

「これは？」

拳治は地面に突き刺さる一本の棒を指差す。

「スコップだ」

「そうか」

「…俺からも良いか」

そう言いながら知晃は地面に開いた大きな穴を指差す。

「拳治…あれは？」

「クレーター」

「なんで学校にクレーターがあんだよ」

先日…と言うより昨日、拳治が能力発動により轟音を出した際。

化物と一緒に地面も捲れ上がっていたのだが。

「で？ この穴ぼこがどうしたの？」

「うむ、それがな」

すると知晃は、スコップを片手に拳治に近づき、それを手渡す。

「じゃ、たのんだ」

そういうと知晃はそのまま職員室に戻って行った。

「……………はあ？」

ない。

どこにも無い。

図書室の中、ソフィは棚を漁っていた。

炎を生み出し、剣を生み出し、体を硬化し、さらには音の増幅も行える超能力の研究資料。

前例がない、それももちろん考えた。

しかし、前例がないならなおさら拳治の実験記録が此処に陳列されているはずだった。

そもそも能力と言うのは7系統に分類される。

熱や炎を操る 炎系統

温度調節や水分を操る 氷系統

物質変形や重力操作の 土系統

風力や空気圧縮、雷撃などの 風系統

光量調節やレーザー光線の 光系統

陰や暗闇を人工的に作り出したり操作する 闇系統

相手に幻を見せる事しか出来ない 幻想系統

それぞれに長所や短所があり、やれる事が違う。

ソフィの招来術は闇系統に分類され正式名称は『闇系統招来術部門』

青の寮長、秋本原樹の『テンブラーチャイ温度干涉』は『氷系統温度調節部門』

赤の寮長、杉崎歩美の『サイコグラフィティ質密重操作』は『土系統原子構成部門』

しかし、拳治は……

「お探し物はどちらですか？」

不意に後ろから声がする。

ソフィはゆっくり振り返ると、そこには髪、服ともに真っ黒な青年が立っていた。

しかし、ソフィは相手が分かると興味が無いのかすぐさま検索にもどってしまふ。

「おいおいつれねーなあ、もっと言葉のキャッチボールしようぜ」

「？」

「時間の無駄です」

「おゝ怖い怖い」

相手は完全に演技丸出しでそう言い放つ。
しかしソフィは完全無視だった。

それにしびれを切らした男は、ソフィの腕を乱暴に掴むと袖を捲り上げた。

「お前…何を呼び出した？」

招来術士の能力は呼び出した者と契約する事。
そして、契約すると腕に大きな入れ墨が増えて行くのだ。
以前に男が見た時よりも増えているらしい。

「べつに…貴方には関係ありませんよね？」

「まあな…でも、一応俺も寮長なんでな、あんまり物騒な事してると…」

男はソフィの目の前まで来ると顔をズイッと近づけ。

「つぶすぞ？」

「……………大丈夫ですよ、覚悟はしてます」

そうつぶやくソフィ。

それに男は「そうか」と返し、図書室から出て行く。

「……………全てが始まったら、貴方でもどうにも出来ないのだから」

ソフィは、男に。

黒の寮長、『神崎 真』に小さくそう告げた。

「へえ、それは大変ですね」

「うん、大変なんだ。だからこころで手伝ってくれても……」

「やです」

「……………そうか」

結局なんやかんや言いながらどんどん手を動かし、穴を埋めている
拳治を

画面の前の皆さんは誉め讃えてあげて下さい。

とそこで泉は立ち上がり

「じゃ、私行きますね」

「ん、逝ってらっしゃい」

「…わざとですか？」

そう言いながらこの時間は過ぎて行く。

穴はまだ塞がりそうにない。

問五 なぜいきなり新キャラが登場するのだろうか（前書き）

答え 作者の陰謀だから

拳治「作者お前」

……うう……

問五 なぜいきなり新キャラが登場するのだろうか

赤寮の寮長は『鈴木 歩美』

「これ扱いは酷いよ…」

青寮の寮長は『秋本 原樹』

「せめてルビを取ってくれ」

黒寮の寮長は『神崎 真』

「……泣くよ」

白寮の寮長は『馬鹿牧野 拳治』

「あ、漢字にグレードアップした」

拳治の未来は明るそうだ。

ここは白寮内部の談話室。

分かんない人はハリポタの談話室。

それでも分かんない人は諦めろ。

ちなみに各寮には、談話室、集団浴場が必ず設備されている。
あとは寮長の申請で増築されたりするがこの白寮は寮長が『申請が
めんどくさい』という一言で全くした事がないため初期装備のまま。

そんな中、ここの寮長拳治と。
真新しい制服に身を包んだもう一人の学生。

「とまあここが談話室でい、たいがいここでは何しててもいいよ。
あ、でも夏にストーブ付けたり、冬に冷房付けたら逝かせるから」
とまあこんな風に怖い事をもう一人に教えている拳治。
べつにカツアゲ現場とかではない。断じて。

簡単に言つと、新しい生徒に寮の大まかな使い方を説明していると
ころである。

「と…あれ、名前なんだっけ？」

するとその新しい生徒は、背筋を伸ばし。

「新しくこの学校に転校してきた『九条登』です…」

「度重なるクレームを超えた先に新しい境地が…」

「九条昔情じゃないですし、そんな面倒くさいものには登気しません。そして分かりにくいです。」

作者はこれに名前を決めた一時間後に気づいた。

とまあそんなことはともかくとして、新しいキャラクターが増え（殺新しい仲間が増えて寮のメンバーも若干気になる模様。

「よし、今度は自室を案内します。付いてきて、嫌なら来ないで」

そんな分かりにくく、笑えない冗談を交えながら拳治達は歩いて行く。

キャストは揃った。

あとは物語。

彼らの進む先にある物は。

鬼か、蛇か。

それは、

書^{作者}き手も考え中

問六 なぜめんどくさい事は立て続けに起こるのだろうか（前書き）

答え 呪われてんだよ、きつと

拳治

「よつするにこのキャラは全員、呪い持ちか」

問六 なぜめんどくさい事は立て続けに起こるのだろうか

「これは…」

ソフィは再び闇の中招来術を施行していた。

しかし、そこに現れたのは今までで一番恐ろしく。

しかしそれは生物ではなく。

剣だった。

「はんはんはぐん、はんがはぐん」

そう上機嫌で歌いながら廊下をあるく拳治。

彼の目的はただ一つ。

一日40食限定、焼きそばパン。

いつもよりも早めに購買へ向かうため絶対『一個』は残っているはずなのだ。

まあ倍率が高いため無くなってても文句は言えないのだが。

「……………フッ」

目の前にはただ一つ残る焼きそばパン。

それを拳治はさっさと手に取り。

「さてさてとつとつ買ってズラかりませうか……………ね？」

拳治の手には焼きそばパン……………と誰かの手。

「……………」

「……」

上から下まで真っ黒なその男。

「…またか真。 何だその手は」

「お前こそなんだ、その手をぶった切って捨ててこい」

神崎真も焼きそばパン好きと見た。

ここからしばらくは会話だけでお楽しみください

拳治

「手って何だ、手にそんな事したらそれ食べなくなるだろ。二の腕
辺りまでぶった切って捨ててこい」

真

「食わなくて良いんだ、これは俺が食うから。 とりあえず肩辺り
までぶった切って捨ててこい」

拳治

「お前何言ってるの？ 先に取ったのは俺だぞ？ とりあえず首こ
と腕をぶった切って捨ててこい」

真

「いや、同時だ。 第一俺は昨日食いそびれたんだよ、ここは俺に
譲れ。 とりあえず上半身含めて腕ぶった切って捨ててこい」

拳治

「それは俺も同じだ。 手かっつととよこせパンが裂けるぞこの根暗が」

真

「ならお前がまず放した方が良いんじゃないこの遊び人」

拳治

「…」

真

「…」

同時『オウラアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!』

切れました。

「今日こそ決着付けてやるド根暗!」

「バラバラにして海に捨てたらド遊び人!」

その後、この二人がしばらく購買に立ち入り禁止になったのは言うまでもない。

若干冷える空気の中、泉は歩いていた。
図書館で借りた一冊の本を抱えながら。

彼女自身本はとても好きで、主にファンタジーが好みらしい。

本の内容は、暗闇に包まれた世界を一人の勇者が切り開いて行くと言っシンプルなものだった。

その本をしっかりと抱えて歩いて行く泉。

しかし。

「じんばんは、古畑泉」

彼女に夜が訪れた。

「はあああつ！」

渾身の力で空気の弾丸を放つ泉。
しかしそれは、先ほど現れた声の主、ソフィの呼び寄せる魔物によ
って跳ね返される。

その魔物は以前拳治を襲った時の物と同一。
違つとすれば、全身を覆うドロドロは黒ではなく赤。

その赤いヘドロは泉の能力『エアバック空気圧縮』から生み出される空気の弾丸が当たると一瞬で硬質化してしまう。

しかもその魔物が歩き出すたびに、地が焼け付く音がする。
どうやら高温を帯びているようだった。

状況は最悪。

勝算は低い。

今、泉に出来る事は、出来るだけ人の多い場所へ向かう事。

すばらしい。

この一言が、今のソフィを支配していた。

『アレ』でこの魔物『バリード』をここまで強化できるとは思って
も見なかった。

しかし、空気系統、空気圧縮部門の中級レベル『空気圧縮^{エアバック}』の厚さ
五センチの鉄板をえぐる破壊力を持つ攻撃をもろともしないこの防
御力。

「すばらしい…」

しかし、それも束の間。

前方から来る雷撃に一瞬怯むバリード。

「雷撃…?」

「…え？」

今の雷撃は自分の物ではない。
しかも自分が傷をつける事も出来なかった相手を怯ませるほどの力。

「こんにちは…」

それは九条登転校生だった。

問六 なぜめんどくさい事は立て続けに起こるのだろうか（後書き）

この後は番外編を一つ

例題 1 番外編？なんで？（前書き）

答え PV2000 越え記念だから

例題 1 番外編？なんで？

「…なあ作者」

何じゃいな

「これは何だ？」

そこには（祝 PV200 越え記念）と書かれた看板がぶら下がっていた。

「蜘蛛の糸で吊るした割には結構持つな」

うん、かれこれ二時間くらいだ…

「……………で？」

でって何？

「いや、もういいだろ。それ取っ払って出てけよ
それでソフィと登の激闘の続き書けよ」

いや、もう疲れてさ。

「なにに？」

起きてるのに。

「寝ろよ」

これからもこの小説は作者の廚ニスピリッツで進んで行きます。
ソフィは何を成そうとしているのか？

泉と登はどうなるのか？

そして俺、拳治はどんな能力が隠されているのか？

きっと、見逃せない物語を描いて行くよう努力はするので

これからもよろしくお願いします。

これでいいか？」

良く出来ました。

では、皆さん。

これからも【僕らの力の使い方】をよろしくお願いします。

問七 全力疾走はなぜ疲れるのか（前書き）

答え 持久走なんてクソクラーエ

「答えになってなくね？」

問七 全力疾走はなぜ疲れるのか

「転校生…九条登…たしか貴方は中学等三年、風系統電気操作部門
エレキバッグ
『電気箱』」

ソフィが登のプロフィールを語る中、登はそこまでは驚いていない。
自分の経歴は調べれば簡単に出てくるだろう。

「そう言うアンタは『招来師』か…」

「…いかにも…」

ふふ、せつかく来ていただいたのですから…貴方にも実験台にな
って下さい」

「実験台？」

「ええ…私の新しい…闇を」

瞬間、バリードはその口内に雷を溜め込み始める。
それはすぐに1万Vを超え、登に放たれる。

しかし。

「いただきます」

それに向かって片手を突き出すと、

その雷は瞬く間に登へと吸い込まれて行った。

「さすがはエレキパック…1万Vをもろともしない」

エレキパックは、電気エネルギーを自分の体に蓄積し、それを自由に放出する能力。

しかし、それをソフィは理解した上でそれを打ち込んだ。

「…さあ、実験を始めましょう」

すると、バリードはその巨体には似合わないスピードで

泉を狙い突進する。

それに泉の脳は理解はするも体が反応しきれない。

(当たるっ！)

そう覚悟したが、そうはならい。

バリードの目の前から泉が姿を消す。

バリードは押さえきれずにそのまま壁に激突。

「……へ？」

泉はいつの間にか、登に抱えられていた。

「おっまえ…ボーツとすんな、死ぬぞ！」

「は、はい！」

登はふと自分の足下を見ると、自分の足に電気がほとばしっている。登はさっきの一瞬、自分の足に電気を流し筋肉運動を一時的に活発にさせた。

しかし、その代償はそれなりにあり、「明日筋肉痛だな」と小さく愚痴る。

「それにしても…」

登は少し離れた場所に居る、ソフィと化物を見つめる。

一見柔らかさそうで実質は無茶苦茶固い外皮のバリード。何を隠し持っているか分からないソフィ。

それに比べ、こちらはあまり役に立たなそう風使いな泉雷使いに、完全に正体がばれている登。

…あれ？ 勝算無くな？

とそこでバリードが再びこちらに向かってくる。

今度は腕を振り下ろす攻撃のようだが、ただ早いだけで攻撃は単調。よく見ればかわせる。

「って、私を担いだまま何やっているんですか!？」

あ、わすれてた。

「ひどい!? ってそうじゃなくて降ろして下さい！」

そしてあの化物なんとかして下さい！」

「って全部俺に丸投げ!？」

「む、無理に決まってるじゃないですか! 私非力なんですよ!」

「いや、そう偉そうに言われても…」

とりあえず、泉の事はこの際無視する。

「しないで!!」

とりあえず状況をまとめよう。

「スルー!？」

登の扱える電圧はアバウト3億V。

しかし、貯め過ぎると体の制御が効かないため実際扱えるのは300万V。

貯めておいたのは150万Vでさっき吸収したのが、勘だが約1万V。

約151万Vでけりをつけなければならぬ。

はつきり言っただこの無理ゲーとか嘆きたいがそんな暇も余裕も無い。

出来るなら一発。

この一発に全霊を掛けてやるしか無い。
ん?逃げる?

あの巨体相手じゃ体力が持たない。

「おいアンタ」

「は、はい?」

「来ませんね」

一度、木陰に入ったと思えばそれ以来出てこない。

その木ごと粉碎する手があるがあまりこちら側を手薄にするのは得策ではないと思いやめた。

何より、これは実験だ。

実験動物が早く死んでしまう実験ほど得られる物は少ない。

だからソフィは待つ。

待つ。

ただひたすら待つ。

すんごい待つ。

待つ。

待つ待つ待つ待つ……。

「……………遅い」

そう愚ってしまった。

「……………?」

ふと木を見やると、一人の女。
泉だ。

「仲間はどこにいきました?」

「え、えーと……………ちょっとトイレに……………」

「……………そうですか」

「はい!」

そう自信満々に言っただけのけるこの女はいろんな意味で将来大物にな

りそうだ。

しかし、いない者は仕方ないし。
目の前には待ち続けた獲物が居る。
仕掛けない事は無い。

「ぜえ…ぜえ…明日は絶対寝たきりだっ」

そう言いながら校内の階段を全力で上る登。
ダジャレじゃないよ？ ホントダヨ？

一瞬だけソフィが目をそらした隙に木陰から飛び出し、丁度開いて

いた窓から校内へ突入した。
ありがとう、窓を開けっ放しにした人。

拳治

「ぶえっくしゅん！」

真

「どうした？」

拳治

「あー、なんだろうな」

しかし、それで登の仕事は終わりではない。
目指すは屋上。

目標はソフィの真上。

ソフィに己の最強の一撃を食らわすために。

「はああああああ!!」

一方泉は、こちらも全身全霊で戦っていた。

前眼に圧縮した大気をバリードに向けて打ち出す。

先ほどよりも目が慣れてきたのか、相手の攻撃を避けやすくなってきた。

余裕を持って打ち出される空気圧縮弾は意外にも相手を吹き飛ばせる事がわかった

隙だらけの胴体に打ち込まれた、弾はバリードをソフィに向かって吹き飛ばす。

しかしそれをバックステップのみで回避するソフィ。

こちらも随分と余裕のようだ。

「やれバリード」

するとバリードは再びその口内に雷を溜め込み始める。

それを見たたん泉は全力で距離を開け始める。

さっきは登がいたから何とかだったが、はつきり言って今この状態で食らえば

最悪死ぬ。

「はあ…はあ…つ、付いた」

ようやく屋上に到達した登はすぐにその能力を発動する。

チラッと横目で泉達を見ると、かなり危険な状態であるのは一目瞭然だった。

だから登は急ぐ。

イメージするのは雷。

形作るは棒状の物。

そして、生まれる物は。

登の手に収まったのは、雷を帯びたハンマーだった

問八 なぜ主人公より目立つのか（前書き）

答え 今貴方は喧嘩中

問八 なぜ主人公より目立つのか

「はあ…はあ…」

泉は今も逃げては吹き飛ばし。

避けてはぶつ飛ばし。

しかし、そんな事がいつまでも続くはずが無い。

そして相手のスタミナは未知数。

かなり厳しい。

この校舎は小学生から受け入れをしているので無駄に高さがあり、しかも一階一階の感覚が広い。

最悪、登が屋上に到達する前にこちらが力つきるかもしれない。

しかし、やるしか無い。

相手は命までは取らないだろうが、痛いのはヤダし。

なにより本当に命まで取らない保証は無い。

だから泉は避ける、逃げる。

時々ぶつ飛ばす。

「いつちよ本気で……」

先ほど作り上げた雷のハンマーにさらに雷を纏わせる。

これは登が今扱える電力のすべてを注ぎ込んでいるのだ。

そして登は懐から、こんな時のためにいつも所持している、鉄球を取り出す。

人に本気で打つのは初めてだ。

しかし、打たなきゃこっちがやられるかもしれない。

だから迎え撃つ。

全力で。

登は屋上の手すりに足を掛け…

大きく跳躍した。

打ち合わせどおり、泉は登を確認すると。

出力を上げてバリードを吹き飛ばす。

もちろんそれをソフィはバックステップで避ける。

真上に上るが居る事を確認せず。

「最・大・出・力っ！」

すると、登は鉄球を宙に放り。

それを、真下へ。

ソフィへ。

打ち込む。

すると。

それは、雷と共に。

まさに落雷となりソフィへ。

すぐ後には凄まじい音とともに土煙が上がった。

「やったか！」

なんとか、空中で体制を立て直した登は着地するとその煙の中を確認する。

「予想外の威力です…さすがはエレキパック…いえ、今のはエレキパックの力だけではないですね？」

絶望の音が響く。

ソフィは、全く同じ場所に立っていた。

バリードは防御に回ったためか完全に腹を貫かれていた。

しかし。

彼女は立っていた。

剣を携えて。

問九 最後はいつも決まらないのはなぜ？（前書き）

答え ……………えへ

「じまかしても駄目」

問九 最後はいつも決まらないのはなぜ？

「剣…？」

ソフィは一步も動かずにその剣を構えていた。

最大威力で放った鉄球は無惨に真つ二つにされ、地面を抉っていた。それを視界に入れた瞬間に登と泉に絶望が訪れる。

「危なかったですね…これが無ければ私の負けでした。」

そう坦々と言葉を並べるソフィは、腹に穴の開いたバリードを引っ込め、一步一步近づいてくる。

死ぬ。

そう思った…

しかし。

ソフィは二人をそのままスルーすると、ゆっくり黒寮の方向へ進んで行く。

「え？」

二人はぽかんと口を開けてソフィを見つめる。

「?…どうかしました？」

「え…いや…とどめささないの？」

泉のその質問にソフィは、できの悪い息子を見るような目で…「登）やめて。そんな目で見ないで」

「別に、貴方達を殺しても構いませんが…その前にやらなければならぬ事がたくさんあるのですよ…私には」

そう言うと、ソフィは再びゆっくりとその場を去って行った。

「はあ…」

ソフィが視界から消えると同時に泉と登は大きなため息を吐きながらその場にヘナヘナと倒れ込んだ。

登に至ってはだんだん筋肉が悲鳴を上げてきた。

「し、死ぬかと思った…」

そう言いながら登は泉の方を見るが、彼女は完全に意識が飛んでいた。

それをめんどくさい目で見ながら

「え？まさかこれ運泉ばなきゃならないの……はあ……」

再び登は立ち上がると、泉を抱えて歩き出した……。

一方職員室……。

「で？なんでここに居るかは分かっているな？」

そう知晃が凄まじい殺気を放ち、しかし顔は天使のような笑顔で拳馬治真鹿に問いかける。

「漢字のまんまだ」

「ひらがなになった!？」

「聞けえ！」

食堂の二人の喧嘩を止めるために出た被害が。

けが人 74人

そのうち学校職員 43人

被害総額 約400万円

二人のバカの夜は長い

問十 なぜいきなり日常に戻るのか（前書き）

答え 俺に聞くな！

問十 なぜいきなり日常に戻るのか

「では出席をとります」

はい、皆さんご存じ…ご存じ？

違うな、まだ一回しか出てないもん。

俺は青の寮長、秋本 原樹だい。

久しぶりに授業に出ている原樹。

久しぶりというのは、もともと寮長には仕事を与えられ、扱いはほかの教師と何ら変わりない。

しかし仕事が忙しく授業に出れないこともあるので、課題をこなせれば授業の欠席を出席扱いしてくれる制度がこの学校にはある。

さて、久しぶりに授業に出たはいいが………

内容が全くわからん…

やっついていることはその頃の高校生と変わらないが…

早…

早すぎる…

こんにちは、みんなお馴染み杉崎 歩美です。

原樹のやつが授業に出るらしく、遊び相手がいなかったため私も授業に出てみることにしました。

しかし。

…わかんない

…全然分かんない…

ついていけない気がしない…

よし…寝よう

よし。この話の主人公 牧野 拳治だ。

今回拳治も、久し振り…ではなくいつもどおり授業に参加。
というのも、拳治は「課題やるのめんどい」との一言でそれを破棄。
当然授業に出なければ出席扱い、でなければ欠席。

そういう扱いで、寮の仕事も大変。

のはずなのだが。

拳治はそれさえも破棄。

もう寮長を下されてもいいはずなのだが……

「拳治くん？なに独り言呟いてるのかな？電波人間？」

「ごめんなさい、反省はします、後悔はしません」

「ちゃんと謝れ！」

……の、登です

今現在俺はベットの上にあります。

原因は全身の極度の筋肉痛です。

非常に厳しいです。

むしろ泣きそう。

簡単に事情を説明すると。

められます。

今は実技の時間。

「次、風系統空気圧縮部門エアバック空気圧縮、泉」

「は、はい！」

試験官が泉の名と部門を呼ぶ。

泉は全身ガチガチで手足が真っ直ぐピンとなったまま歩く。じつに歩きづらい。

頭からは昨日の事などすっかり忘れてらしい。

内容は簡単で、ガラス瓶の内部にどれだけ空気を入れられるか、と

いじめる。

「痛っ！」

ガラスケースが吹っ飛んで顔面直撃。

それぞれの日常

問十一 なぜ主人公の設定が何となく明らかになるのか(前書き)

答え さあ？

「お前作者だろ!？」

問十一 なぜ主人公の設定が何となく明らかになるのか

「でもって、最近校内破壊率が高くなってきているからそこそこうるをだな…」

「　　」

「ポリポリポリポリ」

「モグモグモグモグ」

学園内の会議室を借りての雑談。

もとい、第457回寮長会議が行われている。はず。

「誰も聞いていないな」

がんばってまとめようとする原樹。

「え、ホント！？マジ！」

馬鹿でかい声で電話する歩美。

ケータイのストラップの量が半端無い。

「ポリポリポリポリポリポリポリ」

ポテトチツ スを食べまくっている真。

ああ、カスがボロボロ落ちて行く。

「モゴモゴモゴモゴモゴモゴモゴモゴモゴ」

焼きそばパンにかじり付く拳治。

もう一度言っつ。

寮長達の寮長達による学園全体のための会議。
それが寮長会議。

すると。

「おう、オメエーらやっているか」

突如ドアが開きそこから知晃がやってくる。

刹那。

「という訳で今回はこの校内破壊率をいかに減らすかが問題で……」

「現在の予算はどうなってるんですか？」

「そもそもなんで破壊されるんだ」

「俺とお前のせいだ」

一瞬で完全真面目モードに切り替わった寮長達。
馬鹿ども

そのスピードはまさに刹那の極みだった。

「で、なんで学校が破壊されてんの？」

切り出したのは真。

あの後知晃が帰ってからまた刹那のスピードでだらける面々だが、真はその話を持ってきた。

「ほとんどがこの前のお前らの喧嘩が原因だ」

「「「うう…」」」

真と拳治は縮こまる。

「で、でもこの前の青寮に大穴が開いたのは温度干渉テンブラーチャイのせいだよな？」

「おまえいい加減能力名で呼ぶのやめろ」

言い返したのは真で、言っているのは以前原樹がキレて歩美にぶつ放した氷柱の事。

しかし、それを言っていると寮長全員が破壊回数が多いので誰も何とも言えないが。

「いいじゃねえか。誰に迷惑掛かるわけでもねえし、俺はこっちの方が呼びやすい」

なら、同じ能力名の人物が複数いたらどうするつもりだ。という突っ込みを入れる人物はこの場所にはいない。
そこで原樹が。

「まあ何かあったら拳治が片付けるといふ方針で」

「すまんがそこに行き着くまでの顛末を語ってくれないか？」

「……はあ……だからお前はいつまでたっても拳治馬鹿なんだよ」「」

拳治以外

「何このシンクロ率。そして真はこの前ルビが「ばか」だったろ」

「そこは気にするな」

と、ルビネタをしているところに歩美が割り込む。

「アタシはほら、戦闘に向かないからさアタシの能力」

「そんな事言いながらこの前能力で戦車作ってたけど気のせいかな
イコグラビティ
密重操作」

「うう…」

あっさり真が玉砕した。

そこで今度は原樹。

「俺は寮長の仕事に忙しい」

「もめごとを鎮圧するのも寮長の仕事だぞ温度干涉
テンブラーチャー」

「ちっ…」

「舌打ちしやがった」

これもあっさり玉砕。

「じゃあお前はどうなんだよ」

切り出したのは拳治だった。

「俺か？俺の能力は闇統王だからなあ…不可能はない
ダークネス」

「それお前の自称だろ」

真の本当の能力は絶対死刑領域キルゾーンと呼ばれるもので、真の周囲に黒球

を生み出しそれを飛ばす事でそれに触れたあらゆる物を「殺す」事が出来る能力。

しかし、真から一定の距離外に出ると黒球は消えてしまい。しかも真自身出現させられる黒球は10個のみ。

ダイクネス
閻統王は真のあだ名のようなもので、真は自分の系統、閻属性の能力を全て平均的に扱える体質なのだ。

「俺のはやり過ぎるオーバーキルなんだよ、ぽんぽん使えるか」

「なるほど」

拳治もようやく理解し。

「……………まともに対応できんの……………俺？」

原樹や歩美を代表して真が一言

「がんばんな、幻想系統最強『ナイトメア現実上書』」

なぜか、拳治が学校のもめごと対応係に任命された瞬間だった。

問十一 なぜ主人公の設定が何となく明らかになるのか（後書き）

なんかさらさらりと能力名が明らかになりました。

許してつかあさい

問十二 なぜ寮長達は戦闘描写が少ないのか(前書き)

答え 大丈夫、後半で全員戦う事になるから

「それネタばれ」

問十二 なぜ寮長達は戦闘描写が少ないのか

幻想

現実にはない物事があるかの様に思い描く事。

目の前の壁が邪魔なら打ち砕け。

自分に害成す物は切り裂け。

迫り来る害は吹き飛ばせ。

出来なければ思い描け。

イメージしろ。

想え。

全てを。

砕けぬのならその手を鋼に。

切り裂けぬのなら剣を生み出し。

吹き飛ばせぬなら風を巻き起こし。

全ては俺お前の想うままに。

それが俺俺お前の能力力。

チャーチャーチャラチャ、チャ、チャ、チャ、チャーチャーチャラチャ、
チャ、チャ、チャチャチャチャチャチャチャチャチャ、チャ、チャ、チャ、
チャ、チャ…チャン

ラジオ体操のアレ

なんの風の吹き回しか歩美は早起きして、寒い中ラジオ体操（CD）

を初めていた。

その隣には拳治、登、その他赤と白の寮生達数名が、眠そうな目を無理矢理開いていて。
というのも、昨日の夜。

談話室で寮の女友達と一緒にテレビを見ていたところ。

『朝に軽い運動をすると血行が良くなり頭が通常より早く目覚める
という……』

というのを、何かの健康番組で怪しいおばちゃんが話しているを見ていたのだ。

ちなみに制作会社が『眉唾プロダクション』となっていたのは気にしない。

提供が『ネズミ肉専門店』とか『怪獣小売店 レットキング』となっていたのも気にしない。

そして意味が分からない。

そんなまさに眉唾物を見て、歩美は。

「そうだ、ラジオ体操をしよう」

「京都行くみたいに決めるのか」

拳治の部屋で自分の意見を唱えていた。

ちなみに原樹の部屋で同じ事をしたら貼っ倒されて廊下に捨てられた。

「いいじゃんいいじゃん。あたしはどうせ二日やったら飽きてやめるし」

「結果が見えてるのならやるなよ。あと俺は基本ボケ役だからな。突っ込みじゃないからな読者の諸君」

と言いながら拳治が画面越しに貴方の顔を見つめているのを想像すればいいと想う。

しかし、そんな拳治の言動を無視して、歩美は持ち込んだバックからラジカセを取り出し…

「って、どこでやんの!？」

「へ?」

「あ、いや…:そんな『何当たり前の事言ってるの?』みたいな顔やめてくんない?」

「やめてくれない」

「うん…:とりあえず片付けて」

そう言われ歩美は仕方なくラジカセをしまった。
そして。

「とりあえず…:ラジオ体操について何か知っている事があつたら提
供しなさい」

「知らねーのかよ!?!」

というわけで。

一日目

とりあえず元氣一杯にラジオ体操にいそしむ歩美。
眠い目を赤くなるまで擦ってふらふらしながらラジオ体操する他数
名。

二日目

「なんか疲れたな」

なんて愚痴をこぼしながらラジオ体操する歩美。

ラジオ体操に若干やる気を出してきた他数名。

三日目

「zzzzzzzzzz」

完全放棄な歩美。

元氣一杯にラジオ体操する他数名。

「突っ込まないよ？突っ込んだら負けだよ？」

所変わるが、ここは廊下。

詳細に説明すると、中学塔から高校塔に繋がる渡り廊下だ。はつきり言って、生徒は他の学年にはあまり興味を示さないので、ここを利用するのは教師か、もしくは他学年にラブレターを渡しに行く女子生徒くらいだ。

そんな廊下を通っているのは、みんなご存知数学教師知晃ちゃん…「
ちゃん？」(黒)

知晃教諭でございますごめんなさい。

その手には補習用のプリントと拳治の仮通知表。

今月に入って三回目となる補修。

いい加減知晃も飽きては来たが、ここは義務教育なので見捨てるわけにも行かない。

義務でなければとつくに切り捨てているが。

と考え事をしてしていると、前から他の教師がやってくる。

手にはここからでは詳細は分からないが…何かの会計報告書だろうか…が握られていた。

「渡辺先生…」

そう君の悪い声で話しかけてきたのは、黒い髪を後ろに束ね、度が強そうな眼鏡をかけている、名前は…『水面聖』みなもとのせいだっただろうか。

「なんですか水面先生」

この気味の悪い教師は知見も苦手である。

『も』と言うのは、教師の間でも気味の悪い方で、宴会は誘う事は無いし、それ以前に参加しようとしてもしない、時々小さく笑う、などから気味悪がって近づかない者が多いのだ。まあ言わないが。

すると聖はその手にある会計用紙をこちらに見せてきて。

「今回の『貴方達』の飲み会の領収書が回ってきたんですが……落とすんですか…経費で…」

無駄に貴方達を強調してくる…むかつく。

「さあ、私は自分の分はちゃんと払ったんで詳しい事は分かりません…が、私ならその領収書は破り捨てますね」

「そうですね」

そう聖は感情のこもらない声で言ってくる。

そのまま何も告げずに歩き出した。

知晃も、これ以上は話す事は無いので歩き出す。

これで終わりだと思った。

「もうすぐ革命が始まりますよ……大きくて暗い、全てを巻き込む革命がね」

知晃はその言葉に歩みを止めた。

振り向くと、聖も同じ様に止まってこちらを向いていた。顔色ひとつ変えずに。

「どつという意味で？」

「そのままです」

「それはいつ起こる」

「近い未来」

「……貴方は私を試していますか？」

「お好きな様にとらえて下さい」

「なぜそれを私に教えたのですか？」

その質問に聖はしばし止まり。

「……その革命は私に取って邪魔なんです。でも貴方ならそれを阻止する当てがありますよね？」

その答えに知晃に4人の寮長馬鹿浮かぶがすぐに打ち消す。彼らは寮長という役を背負っているが、まだ子供だ。

「邪魔なんですか」

「ええ」

「その革命を止めれば終わりですか？」

「いいえ、それが終われどもすぐに新しい革命が始まります」

「……その中心に立っているのが貴方という可能性は？」

「信憑性がありませんねえ」

「否定はしないんですね」

「ええ」

「なら……」

知晃が聖を睨みつける。

「ここで潰しても構いませんか？」

それに聖はクスリと笑う

「可笑しいですね、貴方はもう少し冷静な方だというのが私の評価ですが……」

それに知晃も笑う

「俺ははっきり言ってその全てとやらが国だろうが世界だろうがどうでもいいが……ここは俺『たち』の家なんだよ」

睨みつけながら一歩ずつ近づいて行く。

「キ共この学校に居る生徒は俺の子供みたいなものだ……だから俺の生ガ

徒達に手え出したら……殺す」

「できますか？」

「やってみる価値はあるぞ？」

その日、渡り廊下は粉碎された。

問十三 風は闇に勝てるだろうか(前書き)

答え 黒く塗りつぶされるであろう

問十三 風は闇に勝てるだろうか

「はああああ」

と盛大なため息を吐きながら補修室で待機する拳治。

数十分前にここに呼ばれ。

「ちよと教材忘れたから取りに行ってくる…

いいか、うるうるするなよ。ここにいろ」

そう、そう言われてから数十分。

「おせーなー…」

いい加減足が棒になりそうだ。

教材とともに鍵も忘れたらしく、教室も開いていない。

「はあ…いつその事『事故でも起こって補修無し』になんねえかなあ…」

「ちゅ、チユドーン！…！…？…？…？」

所少し変わりここは渡り廊下…

…だった場所。

その場所にいた知晃はすぐさま外に飛び出し、エアハンマーの能力で空気を固め足場にし、校庭側に移動する。

それもなるべく早く。

「ったくなんつー破壊力だよ……」

そう愚痴をこぼしながら後ろを向く。

そこには全身真っ黒な装甲を着込んだ聖が『宙に浮いていた』。

「たしか……『ブラックバトラ闇夜叉』だったか……」

地面に降り立った知晃が聖にそう問いかける。

すると、聖はゆっくりと空を移動しながら。

「ええ……闇属性闇装甲系統の上位能力です」

その言葉から知晃は自分の頭の古い引き出しを開けてそれに関する情報を引っ張り出す。

闇装甲系統の能力は発動中、闇から作り出す武器を装備するという能力。

上位になればなるほど一度に装備出来る数は上がっていき、威力も増していく。

そのなかでもブラックバトラ闇夜叉は、その能力の最高峰能力。闇属性の肉弾戦最強の能力といわれている。

それに比べてこちらはただ空気を圧縮したり固めたりするだけの能力。

「分が悪すぎるだろ……」

「ならおとなしく降参しますか？」

「アホか、俺は今から補修授業を受けさせるところぞの馬鹿よりも負けず嫌いだね」

「私は生徒達にこれから革命を起こる革命を止めてくれればそれでいいのですが」

「言ったる？ガキは不参加だ」

「そうですか……なら」

聖は闇を片手に集め武器を生成する。

「貴方が死んでくれれば少しは危機感を持ちますかね？」

生成されたのは。

四連ロケットランチャー！。

「って、ちょ、近代兵器なんてありかよ……！」

それを容赦無く知晃に向かって連射しまくる聖。

「あぶねえ!!??」

ロケットランチャーが地面を抉りまくる。

「つとあぶねえ!」

抉る

「つてか反撃くらいさせ…」

抉る

「あああああああああもう畜生おおおおおおお」

泣いた。

というよりロケットランチャーを人間の身体能力で避け続けている事自体が奇跡である。

しかし、一応知晃も人間なので限界がある。

「くっそが…!」

すると知晃は懐から、黒いL字型の物体。それを人は銃という。

「…貴方、銃刀法違反で捕まりますよ?」

「あほか、そんな事百も承知だ：よ！」

銃：正確には強化されたエアージェンのだが：を聖が放つ弾頭に向け、トリガーを引く。

すると、ベコン！という音を立てて穴が空き、弾頭は宙で破裂した。

「なるほど、それは音からしてただのエアージェン：貴方の能力で威力を極限まで強化しているのですか」

「御察しがいいですね！」

すると知晃はその銃を聖に向けて放つ。

しかし、ただの空気の弾にすぎない弾丸は闇の装甲によって弾かれる。

が、弾かれた弾丸が地面に被弾するとその部分は小さくえぐれる。

「……すばらしい威力：これほどの空気使いはそうはいないでしょう」
「う」

「ほめても何も出ないぜ？」

すると今度はパチンコ玉サイズの鉄の弾を取り出す知晃。
それを素早く装填し。

しかし、聖もただ見ているわけにはいかなかった。

四連ロケットランチャーを消し、片手に盾、もう片手に剣を取り出す。

そして装填がおわった知晃はそれを聖に向ける。

しかし、それを見ながらも聖は前に出る。

しかも走る。盾を前に構えながら。

その盾で攻撃を防ぎながら全身し、近づいたら切る。
それで終わり。

知晃が打ち出す。

それは聖の予想を超えて剛球となって聖の盾を弾く。

「!?!」

「余所見している暇無いぞ」

盾が無くなり、無防備になった聖を撃ちまくる。

聖の鎧を凹ましていく。

当たらなかつた鉄球は地面を深く抉る。

弾切れを起こせば素早く弾倉を交換する。

「はあ……………はあ……………はあ……………」

全弾撃ち終わると、そこには相変わらず装甲は被ったままだが、うつぶせに倒れている聖の姿。

「……………まあ、革命とやらは止めといてやる……………でも、ガキ共に手を出したら、そのドタマぶち抜いてやるからな」

そう言い残すと、知晃はその場を後にしようと聖に背を向け……………

.....カシヤン

「!」

とっさに知晃は振り向く。

しかし、次には横つ腹に走る激痛。

「いつつ……！」

その場につずくまる知晃。

完全に油断していた。

目の前には、先ほどと変わらぬ。

否、さつきよりも重装備になった聖が目の前にいて。

知晃が放つ鉄球の嵐はこの装甲に全て弾かれていたらしい。

「43点…残念ながら課題点ですね……しかし、貴方に再テストはありませんよ」

そう言いながら聖は、先ほど出した剣よりも、もっとえげつないサイズの大剣を掲げる。

「……………やば、しくつたか」

殺されない。

そんな甘い考えはこの男の前では適応されないだろう。

痕跡を消され、自分は他校に転勤扱いになるだろう。

終わった。

「……………あ、補修忘れてた……………」

「自覚してるならさっさと来いよ」

「先生に見てもらわなければならぬ課題がたくさんあるんですが……」

刹那。

冷気が辺りを包み込んだと思うと、次に現れたのは氷の柱。しかも特大サイズ。

それが聖に向かって飛んでいったと思うとその大剣を簡単に吹き飛ばす。

知晃は突如現れた人物に顔を向けると。

「……補修は、キャラにならないぞ?」

「うへえ、マジで」

「今の登場の仕方ではねえ」

そこには、青の寮長原樹と

白の寮長拳治が並んでいた。

問十三 風は闇に勝てるだろうか（後書き）

私は謝らない

「何があった」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7363x/>

僕らの力の使い方

2011年12月11日17時53分発行